

共同研究 ● 驚異と怪異—想像界の比較研究 (2015-2018 年度)

近代的な理性の発展とともに、科学的に証明のできない「超常現象」や「未確認生物」はオカルトの範疇に閉じ込められ、驚異譚、怪異譚の類は「娯楽」や「虚構」として、学問的には軽視されてきた。それはブルガリア出身の思想家ツヴェタン・トドロフが『幻想文学論序説』において、「驚異」marvelous や「怪異」uncanny を、自然界には存在しえない現象を描いた幻想文学、いわゆるファンタジーの部類に入ものとして定義していることからわかる。しかし近世以前は、ヨーロッパや中東においては、犬頭人、一角獣といった不可思議ではあるがこの世のどこかに実際に存在するかもしれない「驚異」は、空想として否定されるべきではない自然誌の知識の一部として語られた。また、東アジアにおいては、実際に体験された奇怪な現象や異様な物体を説明しようとする心の動きが、「怪異」を生み出してきた。双方に共通する「異」なるものへの視線は、自己と他者、自己と宇宙の境界認識によって形作られるものであり、自然の中での人間の立ち位置を映し出す鏡でもある。本研究では、人びとが惑わされながらも、魅了されてきた「驚異」や「怪異」を比較することによって、ユーラシアの様々な文化圏における人間と環境の関係を問い直す。

### 「異」なるものへの視線

筆者は先行する共同研究として、「驚異譚にみる文化交流の諸相—中東・ヨーロッパを中心に」(2010～2013年)の代表を務め、ラテン語で「ミラビリア」、アラビア語・ペルシア語で「アジャーイブ」(いずれも「驚異」という意味)と呼ばれる、辺境・異界・太古の不思議な事物や生き物についての表象を比較し、モチーフ伝播の過程、世界像の相違、文化交流のダイナミズムなどを、旅行記や百科全書といった一次資料にあたりながら検討してきた。この共同研究と科学研究費基盤研究(B)「中東およびヨーロッパにおける驚異譚の比較文学的研究」(2010～2014年度)を連動させ、驚異譚を通して中世イスラーム世界と中世ヨーロッパの比較心性史を構築し、一神教世界を「驚異」という概念を通して包括的に捉えた論文集『<驚異>の文化史—中東とヨーロッパを中心に』を2015年に名古屋大学出版会から刊行した。驚異譚には古代世界から継承された地理学・自然誌の知識、ユーラシアに広く流布した物語群、一神教的世界観などが表れており、比較研究をすることによってイスラーム世界とヨーロッパが共有する文化的な基盤が明確になった。また、11世紀から14世紀頃まではある程度共有されていたこの驚異観が、近世から近代にかけて、ヨーロッパのいわゆる「大航海時代」を境に、



『山海経』に登場する犬戎  
『山海経』(郭璞伝; 蔣応鑄 絵図) 海内北経、第57図

双方の文化圏において異なる展開をみせ始めることも明らかにした。

上記の共同研究を進める中で、驚異譚の作品群に中国や日本の怪異譚を照らし合わせた場合、「驚異」に対して「怪異」の概念はどう定義できるのか、また知識体系に歴史的な接点はあるのか、といった問題への関心が生まれた。驚異および怪異はともに、既知の世界の彼方にある不可知なるものを知ろうとする（あるいは説明して、手なすけようとする）人間の営みが生み出したものであり、これらを比較することによって、人間の想像力と表象物の相関関係や、その基層にあるコスモロジー（世界像・宇宙論）の歴史的変遷を解明することができるのではないかと、という着想に至った。

怪異に関しては、国際日本文化研究センターの小松和彦や東アジア怪異学会による研究の蓄積は厚く、一般社会の妖怪・怪異に対する関心も高まる一方である。2013年には人間文化研究機構の連携研究として「驚異と怪異の表象——比較研究の試み」（代表：山中由里子）を立ち上げ、驚異に関する共同研究と小松の妖怪研究を連動させる可能性について検討してきた。そこでの研究交流を通して、日本の妖怪・怪異研究は国際比較の必要性が謳われる段階を迎えていることが分かり、また妖怪・怪異の研究者たちの驚異研究への期待が大きという感触も得た。

こうして2015年度より始まった本共同研究は、日本および中国の怪異を専門領域とする研究者と、中東およびヨーロッパの驚異を研究対象とする者の均衡がとれるようなメンバー構成となっている。まずは驚異と怪異に関する先行研究の成果を互いに確認し、これまでそれぞれがどのような概念として捉えられてきたか、どのようなコーパスを扱ってきたかについて情報共有した上で、常識や慣習から逸脱した「異」なるもの（異境・異界・異人・異類）をめぐる人間の心理と想像力の働き、言説と視覚表象物の関係を解明してゆく。驚異と怪異を対照するためのテーマやモチーフをいくつか探り、東西という「水平」の比較だけでなく、それぞれの背景にある宗教観・世界像の変化を歴史的に追うという「垂直」の比較も行う。

### 俯瞰し、相対化する

この共同研究においてとり扱う素材としては、以下のようなもの想定される。

- 1) 旅行記・地理書・博物誌・天文書・占書・医学書など近代以前に編纂された一次資料
- 2) 近現代に流布し、採話された民間伝承や都市伝説
- 3) 絵画や奇物などのモノとコレクション

これらのデータは時代によって質や量が違うことは言うまでもなく、比較の妥当性を裏付ける議論を行い、理論的な基盤を築く必要がある。その際、「驚異」あるいは「怪異」を狭い定義の枠組みの中に固定しようとはせず、不思議・稀・奇跡・魔術・妖術といった隣接概念との関係性も明らかにしながら、語彙の変遷を時代ごとに一次資料に沿って確認し、研究会で報告・討議をし、共通理解の土台を作る。その上で、驚異や怪異として語られ、描かれるモチーフの類似性や相違性を議論する。たとえば人魚のような「幻獣」、犬頭族／犬戎のような「異形の民族」、あるいは彗星のような「天変地異」といった東西の共通項となり得るモチーフが議論の糸口



「ニュルンベルク年代記」に描かれた犬頭人  
Hartman Schedel, [Welchronik], Nurnberg: Anton Koberger, 1493, Blat XII

として想定される。

毎回の研究会ごとに下記のようなテーマ設定を行い、議論に方向性を与える。

- a) 驚異・怪異のトポグラフィ：驚異や怪異が現れる「空間」や「時間」の考察
- b) 言説と視覚表象：伝承されてきた言説が視覚化される過程、あるいは実体験からイメージが形成され、膨張・伝播してゆく過程の解明
- c) 驚異・怪異と身体：不思議なものと対峙した際の身体感覚、異形の構造（特定の身体部位の誇張や欠如）、出産・病・死をとりまく驚異・怪異の比較
- d) 驚異・怪異と神・自然：世界像・宗教的背景の比較、異境・異界に関する知識の媒介者の比較

比較の際に気を付けなければいけないのは、特定の文化特有の用語を、別の文化の現象を語る際に無批判に使うこと（たとえば、「イスラーム世界の妖怪」といった表現）である。鳥瞰的な比較研究が陥りやすい一般論化、単純化の危険を十分に認識しながら、一次資料やフィールドデータの緻密な分析に基づいた研究報告を重視し、実証的な比較を行う。

このように本研究は、従来の学問的境界を横断し、思考のつながりをユーラシア大陸規模で究明するマクロな比較研究である。時代や地域ごとに細分化された学問領域に留まっているだけでは得られない、より複眼的な視点から研究対象を相対化することが可能になり、ユーラシアにおける文化接触のダイナミズムを明らかにすることができるはずである。

### やまなか ゆりこ

国立民族学博物館民族文化研究部准教授。専門は比較文学比較文化。単著『アレクサンドロス変相：古代から中世イスラームへ』（名古屋大学出版会 2009年）が、島田謹二記念学芸賞、日本比較文学会賞、日本学術振興会賞、日本学士院学術奨励賞を受賞。編著『〈驚異〉の文化史——中東とヨーロッパを中心に』（名古屋大学出版会 2015年）。